

講演者:

村上 隆 氏 (京都美術工芸大学)

略歴:

1953 年京都生。

京都大学工学部、同大学院工学研究科修了。

東京藝術大学大学院美術研究科修了。

学術博士。

2014 年 4 月から現職。京都国立博物館学芸部長、奈良文化財研究所上席研究員を歴任。2012 年 4 月から、高岡市美術館館長、他に石見銀山資料館名誉館長などを兼任。奈良国立文化財研究所時代から、材料科学の見地から、金属を中心に古代から現代に至る材料と技術の歴史を追及してきた。

専門は、歴史材料科学、文化財学、博物館学。

著書に、『金・銀・銅の日本史』(岩波新書)、『金工技術』(至文堂)、『美を伝える』(監修・執筆:京都新聞出版センター)、『色彩から歴史を読む』(監修・執筆:ダイヤモンド社)、『現在知 日本とは何か』(共著:NHK ブックス)、他多数。

第 8 回ロレアル国際賞「色の科学と芸術賞金賞」、第 1 回「石見銀山文化賞」ほか。

講演タイトル:

「工学と芸術の融合」

講演概要:

工学の究極は、効率化と機能性、そして再現性にあるだろう。一方、芸術の究極は、あらゆる制約から解放され、あくまでも作者の美の追求であり、手作りの産物である。しかし、どちらも「もの」を作りだすことが基本にある。ものを作るには、まず材料が必要である。さらに目的の形を作り上げる技術が伴わないといけない。これは、「ものづくり」の原点である。工学と芸術。一見全く異なるジャンルに見えるが、「ものづくり」を通してリンクする。私は、材料科学の立場から、古代から現代に至る「ものづくり」を解析し、工学と芸術の境界を探ってきた。そして、いつも感動を覚えるのは、マクロで美しいものは、ミクロでも美しいという、物質が根源的に持つ美の世界である。ここに、工学と芸術が根幹で繋がっている姿をみることができるだろう。